

平岩弓枝

江戸の子守唄

御宿かわせみ

文春文庫



文春文庫

168-9

江戸の子守唄

定価 260円

1979 年 4 月 25 日 第 1 刷

著 者 平 岩 弓 枝

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文春文庫

江戸の子守唄

平岩弓枝



文藝春秋

江戸の子守唄・目次	
江戸の子守唄	7
お役者松	38
迷子石	69
幼なじみ	97
宵節句	128
ほととぎす啼く	159
七夕の客	189
王子の滝	216

江戸の子守唄

江戸の子守唄

一

六分咲きの桜に、三日続きの雨が降って、江戸の人々をやきもきさせていたのが、今朝はからりと晴れ上ってすがすがしい春日であった。

満開とみえた時が桜はすでに散りかけているというが、風があるとも思えないのに、間をおいては一片、二片と舞い落ちてくる花片を、二、三歳の幼女は木の下を走り廻って、紅葉のような両手に喜々として受けとめている。

るいは、又、その子と一緒に、袂たもとに花片を受けていた。二人が空中から拾った花片は紙の袋に集められて、淡い桃色のかたまりが出来ていた。

神林東吾は「かわせみ」の宿のわきに立って、そんなると幼女を眺めていた。

知らない人がみたら、母親が我が子を遊ばせている風景とみるであろう。実際、それくらい娘があっても可笑おかしくないの年齢でもあった。

心に屈託があるので、東吾は暫く、そんなるいをみつめていた。が、長くは続かない。

「たまたま、「かわせみ」の裏口へ顔を出した女中頭のお吉が、

「おやまあ、なんでしょう、お嬢さんときたら、若様のおみえになったのも気がつかないなんて……」

「あの子、どこの子だ」

「ちいさいんですか。うちのお客の子なんです。お文ちゃんといいましてね」
るいが、その子の手をひいて戻ってきた。

「さあさあ、お文ちゃんはこっちですよ」

お吉が気をきかせて幼女を連れて行く。

枝折戸しおとを廻って、東吾は庭先から居間へ上った。

この庭の八重桜はまだ三分もひらいていない。

「逗留客なのか」

幼女の親のことである。

「ええ、三、四日、お泊りってことになってるんですよ」

隣の部屋で手早く化粧を直してきて、るいは茶の仕度をはじめた。

季節柄、もう炭火は深く灰の中に埋め込んで、鉄瓶の湯が冷めない程度の温かみを保っている。
「いいんですか、こんな時分からお出でになって……」

細い眉をよせてみせた。

「別に昼間、かわせみへ来てはいけないこともないだろう」

「そりゃそうですけれど……」

「るいのほうはまずいのか」

「とんでもない、るいは東吾様のお屋敷のほうを案じて申し上げましたのに……」

幼なじみの間柄だし、東吾はるいの亭主になったつもりでいるが、身分からいえば、小さな宿屋の女主人と、今は次男坊の冷飯食いながら、親代々、八丁堀の与力の家に生まれた東吾とでは、尋常にいえば縁組の成立するわけがなかった。

いってみれば忍ぶ恋であり、世間をはばかる仲には違いない。

まずいことに、東吾の兄である神林通之進には、夫婦の仲に子がなかった。与力の家は表向き一代限りとなっているが、その実は必ず世襲であった。子のない家は早くから養子をむかえて、万が一の時の跡目相続をきめておく。

兄が、弟の自分を相続人ときめているらしいのは、東吾も知っているし、八丁堀では、いわば公認であった。

その証拠には東吾の人物と家柄のよさを見込んで、今までに養子に欲しいという話は随分とあったのだが、一つとして兄の通之進が首をたてにふらないからでもある。

「弟には、いささか、思うところがございまして、他家には出さぬことに決めて居ります」

丁重に、しかし、はっきりと通之進にことわられた家は一軒や二軒ではすまない。

「あそこは駄目だ」

と、養子縁組の話が一段落してしまうと、今度は、

「我が家の娘を、東吾殿の嫁に……」

年頃の娘を持つ親が動き出した。

だが、こっちはおいそれと話が進まない。

兄の養子になるということは、通之進が隠居のお届けを出すまでは、次男坊の冷飯食いであった。

一まわりも年の違う兄弟だが、通之進にしてもまだ三十なかばの働き盛りで、病身という事情がなければ、まだまだ十年や二十年は引退というわけに行かない。

娘の親にしてみれば、嫁にやったは、次男坊の冷飯食いがいつまで続くかわからないでは、いささか心もとないという懸念もないわけではない。

東吾にとっては、まことに便利な状況であった。冷飯食いが一向に苦にならぬ男である。

鹿爪らしく奉行所勤めをするよりも、親友であり、定廻り同心でもある畝源三郎の片棒をかついで、市井の小事件に首を突っこんだりしているのが結構、性に合っているし、兄の眼をかすめて、「かわせみ」のるいと他人でなくなつてからは、一層、世に出ることを望まなくなった。

るいにしてみれば、男が自分のために一生、日蔭者であることは耐えられない。その時がきたら、いつでも清く別れる決心ではいるものの、この頃では五日も東吾の足が遠のくと、不安と寂しきで一晩中、まんじりもしない有様であった。

「どこかへお出かけでございましたの」

後へまわつて着がえを手伝いながら、るいは東吾が他行着であったことに気がついた。

次男坊の冷飯食いのくせに、東吾は兄嫁の香苗が始終、心をくばっているせい、いつも、洗い張りの行き届いた小ざっぱりしたなりをさせられているが、そこは女で、るいの簞笥のひき出しにも、いつの間にか季節ごとに東吾の衣類が揃ってしまつて、「かわせみ」へくると上から下まで、すっぱり着がえさせずにはいられない習慣が出来てしまつてゐる。

東吾の着物も袴も真新しく、上等なものであることに對しての、るいの問いに、東吾は無造作に答えた。

「麻生殿まで行つた帰りだ」

足袋をぬぎ捨てて、氣持よさそうにあぐらをかいた。

「麻生さま……」

るいは、その家に知識があつた。

東吾の兄嫁、香苗の実家で、父親は西丸御留守居役をつとめている。

「お屋敷は確か本所でございましたね」

「そうだ」

久しぶりに行つてみると、あの辺りにも町家が増えたと、東吾は話した。

「以前、空地だったところに新しい家が建っている。うっかりすると道に迷うほどだ」

武家屋敷は何十年経つてもあまり変化がないが、江戸の町家は増える一方で、地域も東西と北に年々、広がって、それが次々と町奉行所の管轄に廻されてくるので、八丁堀は猫の手も借りたいほど忙しくなつてきているこの頃であつた。

「たまには年よりの話相手に行つてやれと兄上のお指図で出かけたが、どうも甘いものばかり食わされて困つたよ」

故意に東吾は笑つた。香苗の父親の麻生源右衛門は酒をたしなまず、どちらかという甘いものに眼のない老人である。

「麻生さまは、皆さま、お変わりございませんか」

東吾の背後で袴をたたみながら、るいが訊く。

「御老人はいよいよお元氣だ。今でも毎朝、素振りを一千回は欠かさないそうだ」

「麻生さまは、只今、末のお嬢さまとお二人暮しではございませんか」

長女の香苗は神林家へ嫁ぎ、次女の七重というのが、まだ家にいて父親の世話をしているのは、母親が五年前に他界したためであつた。

「七重さまは、まだお独りでございますか」

何気なく訊いているいの言葉に、東吾は内心、驚いていた。女の勘は鋭い、とひそかに思う。場合によっては当家へ婿に来てくれてもよいし、七重を嫁に出すのもかまわぬが、どうか、ばつぽつ縁組を進めたいと思うが……」

藪から棒に、老人から切り出されて、東吾はさんざん冷や汗をかいてきたものである。

「お嬢さん、お膳の仕度が出来ましたが……」

声をかけて、お吉が酒を運んで来た。

「東吾さまなら、本所の麻生さままで大層なおもてなしを頂いておみえのようだから……」

そんなことをいって、るいはいつものように酌に立ってこない。どこかですねていると東吾は苦笑したが、お吉のほうは一向に気がつかないで、盃をとった東吾につられて徳利を持ち、女主人にかわって酒を注いでくれながら、

「あの、どう致しましょう。楓かえでの間のお客さま、まだお帰りにならないんですけれども、お文ちゃんにだけ先に御膳を出してもいいんでしょうかねえ」

二

初更になっても、楓の間の客は帰らなかった。

両親が帰って来ないのに、差し出たことをと、少々ためらっていたるいやお吉も、頑はない子が腹をすかせているのをいつまでも待たせるわけにも行かず、とりあえず、飯を食わせると、腹がくちくちくなって臉が重くなり、しくしく泣き出した。

まだ、舌足らずで、地方なまりもあるからいつていることはよくわからないが、母親を恋しがっているふうである。

「冗談じゃありませんよ、こんなちっちゃな子をほったらかしにして、どこをうろうろしてるんだろう」

子供を持ったことのないお吉は憤慨するばかりで、どうしようもなかったが、るいは生来、子供好きで、産んだことは勿論ないのだが、泣きじゃくるお文をなにかとため、

「おっ母さんを迎えに行きましょう」

と欺^{だま}して、背中におぶい、大川端をひとまわりしてくる中には、ちびは泣き疲れて眠り込んでいた。早速、老番頭の嘉助が抱きとって、お吉が用意した楓の間の夜具の中へ寝かしつける。

「親達は、どこへ行くといって出かけたんだ」

東吾はむしろ、帰って来ない親を案じた。並みの親なら、幼児を残しておいてこの時刻まで帰って来ないというのは可笑しい。なにかが出先であつたのではないかとというと、嘉助とお吉がちょっと顔を見合せた。

「それが、並みの親とは違いますようで……」

心得て、嘉助が宿帳を持つてくる。

男のほうは郡山の百姓で喜三ということになっているが、

「まず、百姓ではございません」

年頃は三十七、八、ちよつと苦み走つたところのある瘦せた男で、

「手前は芸人くずれではないかとみて居ります」

役者などではなく、たとえば下座^{げざ}の三味線もごま化して弾ければ、幕引きや柝^きも打つ。出刃打ちなんその口上もやってのけるし、地方廻りの一座では、そういうのがけっこう重宝がられているものだという。

「どうも、そういう手合のような気が致しました」

女も若くて、せいぜい二十になったかどうかというところなのに、どこかすきんでいて、

「とても水呑百姓の女房ではございません」

「そんな奴らをどうしてかわせみが泊めたんだ。嘉助とお吉がついていて、とんだ手ぬかりじゃないか」

東吾にいわれて、お吉が口をとがらせた。

「あたしも番頭さんも、入ってきたのをみただけで、これはことわったほうが、いいって思ったんですけども、お嬢さんが……」

「るいが泊めるといったのか」

嘉助が白髪頭へ手をやった。

「あいにくどしゃ降りでございました。夜も更けていて、背中に子供さんがねむっているので、お嬢さんが不憫だとおっしゃいまして、ちょうど、部屋もあいて居りましたので……」

「仕様がねえおかみさんだな」

苦笑しているところへ、るいが戻って来た。

今まで子供の枕許についていたらしい。

「かわいそうに、涙のあとが頬にこびりついて落ちないんですよ。お湯にも入らず、ねちまったから……」

「いい加減にしろよ。子供好きが、とんだ仇になるとも限らねえぜ」

いつもは行儀のいい口をきく東吾が、今夜は八丁堀独特の巻き舌でるいに忠告しているところへ、

「楓の間のお客さまがお帰りになりました」